

貴重な個人的体験

平和統一 NEWS No. 88 (2016/1月号)

渡辺 久義

私にとって思わぬ勉強となった体験の話をしてみたい。最近、次々と複数の方々がわが家に布教にこられる。断っておくが、彼らがすべて超善良な人たちであることは保証できる。私は実は、この人たちのくれる冊子のいくつかを見て、これは“共闘”できるのではないかと考えていた。それでこの機会にと思い、玄関に座布団を出して、一人の男性信者から数回の連続講義を聞くことになった。最初から躓いたが、何とか“共闘”の可能性を求めて熱心に聞いた。しかし結論から言うと、それはとんでもない期待だった。私は話を聞いて反論するだけでなく、いただいた教義の解説書を徹底的に読み、この本は疑問の付箋だらけになっている。私は最後に、一度あなた方の教会で話をさせてもらえないかと聞いたが、それはダメだと言われ、それならせめて数名の方々に、わが家に来ていただいて討論ができないかと言ったが、それもダメと言われた。

ここでは、最大の疑問点である、死後の世界はないという彼らの教義に絞ることにする（これはすでにご存じの方も多だろう）。私は、「もしそれが本当なら、絶望で目の前が真っ暗になる」と言った。これは反対のために言ったのではない。本当にそう感じるから言ったのである。特に宗教的でない人も、唯物論者でさえ、本心ではそう思っていないだろう。何かが残ると思っている。しかし彼らの教義書は「人間の記憶、感情、五感などが脳とは別個に、不可解な方法で機能することはありません。脳が破壊された後は機能しなくなります。…我々は全くなくなってしまうのです」と言っている。これは完全な唯物論である。これは我々の経験にも反する。明らかに多くの人が、亡くなった近親や友人に出会う体験をしている。私自身も、ごく最近、死んだばかりの高校時代の友人が夢に出てきたが、これは明らかに普通の夢ではなかった。臨死体験や幽体離脱の話は掃いて捨てるほどあって、私の元同僚のカール・ベッカー氏が、その体験談をネット上で募集したところ、あまりにも殺到したので、とうとう中止したと言っていた。

「それが事実なら絶望的になる」のは、明らかに私だけではない。例の『世界経典』の「永遠への準備」という項目にも、こう書いてある（私はこれを訳して彼に与えた）——「宗教は単に、近親を失った人々を慰めるためとか、現世で抑圧されている人々のためのアヘンとして、来世の現実性を説いているのではない。それよりも、来世という現実は、生きる目的を強化し、地上存在の意味を先鋭なものにするのである。地上で人がどのように生きたかが、

主として、その人の究極の運命を決定する。賢明な人は、永遠なるものに目を向けてこの世を生きる。」

ではこの宗教は、なぜ、これほどまでに人間の完全消滅を強調しなければならないのだろうか？ そこには何か動機があると考えざるをえない。人々が（危険な）降霊術のようなものに耽ることがないようにする方便だろうか？ どうもそうではない。カギは、創世記の「神は土で人を造り、命の息を吹き入れた」というところの解釈にある。ここが彼との激論の中心になった。彼はこの「命の息」は、単なる生物学的生命のことだと言って譲らない。私はこれは、神の御霊（属性）が吹き込まれたのだと言った。彼は、人間に知性はあっても霊魂はないと言う。もしそうなら、人間と他の動物との本質的な違いはなくなるだろう。ゴキブリを踏みつぶせば、死骸を残して完全消滅するように、人間も死ねば完全に消滅する。結局、この教えは、生物は個々に創造されたとは言うが、ダーウィン進化論と同じことになる。ここがポイントと考えてよい。

また彼らは、死者はやがて復活して裁きを受けるとは言うが、神の愛を強調して、人間に責任がないかのようなのである。「ある宗教では悪いことばかりした人は、死んで…責め苦の場所に行き、永久に苦しめられると教えるが、…この教えは神を辱めるもの」で、「愛の神」は決してそんなことをしないという。これでは、悪人にとって都合がいいことにならないだろうか？ 安心して悪事を行え、と言っているように聞こえる。それは曲解だと彼は言うが、私はここに不気味なものを感じる。（動物は人を食い殺しても犯罪にならない。）

人間を支配するために、人間の霊的覚醒を必死に阻止しようとする人たちがいる。ダーウィン進化論を押し付ける人々がそうだ。この宗教は、霊魂の否定は聖書によるものだと言うが、聖書はそんなことを言っていない。そもそも聖書が、「死んで新しく生きる」と繰り返し言っているのは、自己の内部で起こる霊的革命のことであって、肉体の生死のことではない。この普通の聖書解釈を、この宗教は明らかに意図的に歪曲している。

どんな経緯で現在のような教義になったのかわからないが、この宗教は、反目していた国連に突然、取り込まれたという歴史があり、国連機関の WHO が「霊的健全」の概念を認めようとしなかった事実がある。そして何より私が驚いたのは、創始者が Charles Taze Russell (1852-1916) だったことだ。この人物は、私が“共闘”を考えていた相手、この世界を背後から操る者たち、ルシファーを神とする 13 家系の一人だった。